

平成24年度第3回千葉県立博物館協議会 議事録

日時：平成25年3月13日（水）13時30分～15時30分

会場：千葉県立中央博物館 会議室

出席者：委員 小野委員（議長）、鶴澤委員、水島委員、反町委員、
常光委員、西田委員、岡本委員、齊藤委員、
博物館一 中里美術館長、上野中央博物館長、石井現代産業科学館長、
関宿城博物館横山学芸課長（小林館長代理）、豊田房総のむら館長
文化財課一 湯浅文化財課長 萩原学芸振興室長

【会議次第】

1 議事

(1) 報告事項

①各館、今年度実績（2月末現在）について

(2) 協議事項

①顧客の確実な確保を図るため、県民の「学び」への認定や検定など、博物館の存在価値
あるいはブランド力を高める仕組みについて

2 連絡事項

【議事概要】

(1) 報告事項

（各館の2月末現在の実績について、各館担当者が説明した。）

(2) 協議事項

（以下のとおり、事務局から本協議テーマに関連する最近の実績紹介があった。）

1. 県民学習の意欲を高める認定・検定に関する活動として、現代産業科学館の「千葉県の産業遺産とその活用を考える」講座などを紹介した。
2. 博物館の知名度を高める出版・執筆活動として、美術館、中央博物館本館・各分館の新聞等への連載記事掲載、関宿城博物館の展示協力員による執筆活動などを紹介した。
3. 学校や大学の単位認定に関する活動として、美術館及び現代産業科学館での高校生への単位認定に係る事業、海博での大学実習の誘致などを紹介した。
4. 目玉となる収蔵資料を有効活用した活動として、美術館の「移動美術館」、中央博物館本館の新種植物の発見に係るトピックス展や図録復刻版に関する出版社との契約、大多喜城分館の重要文化財の特別公開、分館海の博物館のダイオウイカなどマスコミ等で話題となった資料の展示、現代産業科学館の1919年製「T型フォード」の活用などを紹介した。
5. その他の関連する活動として、美術館の街中展覧会「成田アート展覧会」や震災被災地でのワークショップ開催、中央博物館本館の地元デパートとの提携や震災被災資料の救済活動、大多喜城分館や関宿城博物館の天守閣建築を活用した町興しへの協力、房総のむらの観光拠点とした活用などを紹介した。

（以下、主な質疑応答）

委員A：特別展の収支バランスは怎么样了のか。

事務局：今年度中央博物館で開催したティラノサウルス展の予算総額は1,700万円、収入は約600万円となっている。

美術館：昨年度の山下清展では、1,700万円で、収入は2,200万円であった。

委員A：子どもたちは毎年成長し世代が交代するので、恐竜などの人気のある展示を定期的に打つのはいいことだが、人気のある企画のみを打つという安易な方向に走らないようにしてほしい。博物館のテーマは多様であるので、人気はなくても博物館として行うべき企画はしっかり行ってほしい。

中央博物館：山下清展は特別な例で、美術館・博物館の展示会のほとんどは赤字で、経費を収入では回収することはできない。そのため、県民の理解を得ることは、とても大切で、たくさんの方が来てくれる企画を打ちながら、それに合わせる形で、各館の専門性を発揮した企画も打つ、という形でバランスをとりながら事業を実施しているのが現状である。決して、人がたくさん入ることだけを目的に展示を企画しているわけではない。

委員B：来館者数という数字での評価だけではなく、特別展の狙いがどこまで利用者に伝わったのか、たとえば、「わが町のシンボル」として歓迎してくれた利用者が、波及効果として、新たな動きを始めたなど、利用した方が実際にどう感じたのかが分かるデータがあるか。

美術館：昨年度の「山下清」展、今年度の「光のアート」展、という二つの特別展に共通するのは、初めて来館した方の利用がとても多かったことである。つまり新しい顧客層を獲得できた。今年度のアンケートでは、50%以上が初来館者であったことから、昨年度の成功がリピーターを増やしたと考えている。

委員B：千葉市美術館では、千葉大と連携し、(草花の)木彫の須田悦弘展を開催したが、それを見学した小学校の3年生から6年生の児童が、安易に雑草を抜くことができなくなったと感想を述べるほど、とても影響を受けたようである。山下清のような高い知名度はなくても、来館者に影響を与える展覧会も企画してほしい。

中央博物館：昨年夏に開催した企画展「シカとカモシカ」展は、博物館職員が長年調査してきた結果を基礎にした企画であった。シカは、かわいいだけの動物ではなく、植生を破壊するという害をもたらすことなども、正確に伝えることを目的として企画した。展示を見た人に行ったアンケートでは、「シカはかわいい」という意見があったかと思うと、「シカなどは全部殺してしまえ」という極端な意見もあり、来館者に考えてもらう展示であったことがわかった。

現代産業科学館：利用者の意見を吸い上げる方法として、従来は、自由意思で書いていただいたアンケート結果に依存していたが、外部評価委員から、もっと広く意見を聞くために調査サンプル数を上げ、県民の本当の評価を得るよう努力せよ、という指摘を受け、検討しているところである。

また、昨年度の特別展「帰ってきたはやぶさ」展がヒットして以降、年間パスポートの購入者が増加しており、今年度は、現代産業科学館単独の年間パスポートで、すでに100枚を超えている。この年間パスポートは、5回以上来館しないと元が取れない価格であるので、これはリピーターの増加を示しているのではないかと考えている。

委員C：年間パスポートはすべての館にあるのか。

事務局：各館の単独パスポートと全館共通パスポートの2種類がある。前者が1,500円(小規模館で1,000円)後者が2,000円で、購入した日から1年間有効となっている。

委員D：どの館も多彩な活動を精力的に行っている。入館者や入館料、学芸員、研究員が腰を据えて調査をするという機会が少なくなり、じっくりと企画を練るということができなくなっていく傾向があるのを心配している。

委員A：友の会は各館あるのか、また入会するメリットはあるのか。

中央博物館：現産館を除いて、すべての館がある。

現代産業科学館：当館の友の会は、市への移譲が検討されたとき、一度休止した経緯がある。

中央博物館：友の会が企画する講座などに博物館の専門職員が呼ぶことができるなど、職員との緊密な交流が

可能となること、また館が企画する事業に優先的に参加できる、というようなことが友の会に入るメリットになるのではないかと考えている。入場料については、規則上、友の会の会員だからといって見学料を無料にすることはできないが、博物館事業にボランティアとして参画している友の会の方からは、入場料はいただいている。

委員A：確かに、単に入会するだけではなく、ボランティアなど、博物館の活動に積極的に参画する会員の方が増えることが、友の会にとってもいいのであると考える。

文化財課：友の会の入場料について、県の包括外部監査において、徴収すべきという指摘があったためであることを、御理解いただきたい。

委員E：友の会の入会金はいくらか。

中央博物館：各館それぞれ額は異なるが、入会金は払ってもらっている。(事務局補足：中央博友の会の場合、一般会員2,000円、家族会員3,000円となっている。)

委員E：他の施設の例では、友の会の入会費は、何回か施設にいくと元が取れる、という意味での特典を与えている場合もあるが、また、会員でなければ参加できない見学会や講座などを設けて特典としていところもある。(事務局補足：前者については、上述したとおり入場料無料とできないため困難であるが、各館の講座や観察会等の参加には、友の会枠を設け、優先的に参加できるようになっている。)

委員F：入場者の定義はあるのか。

事務局：無料入場者・有料入場者それぞれに、年齢層等による様々な区分があり、その区分ごとに統計をとっている。また主催の講座や観察会の参加者数も含まれている。

委員F：(街角アートなど、地域に出て行った事業の参加者も加えるなど) カウントの仕方の風呂敷を大きくし、職員の努力がむくいられるようにしてはどうか。

事務局：各館が設定した5年後の目標値には、総利用者数という概念を設定し、連携事業等も含めている。またインターネットアクセス数、問い合わせ件数も含んでいる。

委員A：(学びへの認定・検定については) 無理に認定する制度を作る必要はないと思うが、今後、研究員の負担を減らす意味でも重要なボランティアの積極的な受け入れを考慮すると、ボランティアとして活動するための研修やそれともなう資格認定の制度は考えてもよいと思うが、現状はどうか。

中央博物館：当館の展示室ボランティアという制度では、まず希望者がボランティアとして登録し、展示室で来館者の案内等を行ってもらっているが、その中から、ある程度の年数を積んだ方、あるいは当館職員の研修を受けた方については、テーマを決め、ボランティア解説を担ってもらっている。

委員A：検定資格を出しても必ずしもボランティアをやる必要はないが、ボランティア資格をもっているということがその人のステータスとなればよい。

委員G：千葉学検定を、NPOがやっていると聞いているが、それと連携をとるという試みはどうか。たとえば、認定試験が100問あるとして、その中の20問は、博物館に行かなければ解けない問題を設定してもらえようになれば、確実に入館する人が増えるし、リピーターになってくれる可能性も高まる。まずは、まず来てもらう手段として、認定・検定を活用するという考えが必要ではないか。

委員C：ブランド力としても、それはよいのではないか。

中央博物館：NPO自然学校がシニアの自然体験のスクールを創った。中央博の専門職員がその講師を行っているが、NPOの理事長などは、今まで中央博の存在を知らず、千葉にこんな博物館があったのか、と驚いていた。認定・検定を行うような人達への周知が、不足していたと感じた。

委員F：全館が力をあわせ、大きな目標に向かって進むのがいいのではないか。たとえば、千葉県内ミュージアムのブランド力アップの一つとして、世界遺産の推薦というのを一つのプラットフォームとして、(全館が力をあわせ) 調査研究からはじめてじっくり取り組んではどうか。最終的に世界遺産に行く

かどうかはともかく、県民に千葉県をもっと知ってもらうことに繋がり、また学芸員も研究者魂に火がつき、博物館も活気が出るのではないかと。たとえば「波の伊八」は欄間彫刻で葛飾北斎に影響を与えるなど、豊富な話題が千葉県にある、そういった里山や里海に関連した自然遺産・文化遺産を通じて、千葉県のミュージアムのブランド力をアップしていくとともに、逆に、何か関連する展示などを開催するときには、「世界遺産」という冠をつけてやれば、集客力にもつながるのではないかと、房総半島には、まだまだ世界遺産資源がたくさんある。たとえば、南部の方では、いすみの行元寺、御宿の岩瀬さんの写真（海女の人たちに関する写真）など、世界記憶遺産に申請すれば、通るのではないかと。筑豊の炭鉱を描いた山本作兵衛さんの作品は、世界記憶遺産に登録されたが、その背景には、地元の石炭資料館の地道な活動があったからである。千葉県の記録写真や、大山の棚田や不動尊は、文化財の保護修復ということにも、世界遺産という看板があれば、知事も含めて、やる気をもつのではないかと。北部では、関宿城博物館と富士山の景観、産業遺産も関係するかもしれない。これら文化遺産を、県民を巻き込んで発見、または創造していく活動が大切である。

文化財課：世界遺産は地方公共団体から文化庁の方に、候補として取り上げてもらいたいものをリストとして提出することになっているが、平成19年度に文化庁から最後の公募があったが、これが最後であった。これ以降は、文化庁は、新たに受け付けない方針であり、今後もそうである。ユネスコに申請するための暫定一覧を文化庁が作成しており、現在、富士山、富岡製糸場などを含め12件ある。さらにその下に暫定一覧候補というリストもあり、全27件ある。今後は、最初の12件がどう動いていくのか、その後、候補27件がどう動いていくのかであるが、文化庁からこれらの候補を上げてきた自治体には、今後の課題ということで、かなり厳しい注目が付けられているらしい。世界遺産の登録システムの現状については、このようなところである。

委員G：推薦活動そのものではなく、8施設が一つのテーマを掲げて行うという提案として考えてみてはどうか。

委員F：共通してやれるテーマがあると、千葉県の博物館全体の知名度があがるのではないかとということである。

中央博物館：合同企画事業は、平成16年度に有料化したときに立ちあげた。一千万円近くのお金で、竹展を開催した。翌年は舟についてやった。それ以降は予算の減少等により、学習キットをつくったりしている。房総のむらで行った里山の展示には、中央博からもたくさんの標本が出た。出羽三山展やシカ・カモシカ展などのように、民俗の展示にも自然の関連するものを取り入れたり、シカと人間のかかわりなど、自然の展示であっても人間との関連を取り入れたり、民俗と自然がまとまった企画展を行っている。また、歴博と連携し房総半島の中山間地域の土地利用の変遷について研究を行っているが、ニゴアナという用水路について、それを地形・地質の面、植生の面、民俗の面、古文書の面など、多方面から人が集まって研究しようとしている。何年かの継続的な研究を行った後には、最終的には大きな展示会に結び付けたいと考えている。このように、2館、3館の連携は、活発になりつつある。各館の企画展も、自館だけでは限界があることが見えてきたので、今後は、連携して一つの展覧会を創っていこうという動きは今後ますます活発になっていくのではないかと考えている。その意味で委員の提案は、これからの博物館のネットワークにはいいことではないかと考えている。

中央博物館：人と自然の文化の調和共存のシステムが、里山・里海であったが、これは未来に向かったモデルになると考える。このような研究では、トップランナーにあると考えている。これを将来に活かしていきたい。

委員A：ブランド力という点では、広報が大切。新種の植物発見はうれしかった。千葉大で開催される分類学会でも取り上げられる。千葉テレビなどでも、もっとやってほしい。合同企画の関連では、千葉県生物学会で議論しているが、千葉県自然史フェスタという構想をもって、人間生活と自然の

テーマは永久に続くテーマだと思っているが、これを博物館の力を借りたいと考えている。また、知事にもぜひ顔を出してほしい。地元のNPOとの連携として、大多喜などでやっていることは、これから重要。お互いにお金がないが、お金がないどうしが集まって新しいものを発信することは可能性だと思う。NPOは補助金の受け皿にもなれるし、連携は、今後の重要な方向性の一つだろう。

委員A：関宿のように、他県に隣接する館では、他県との連携、あるいは他県の学校との連携とかはあるのか。

関宿城博物館：茨城、埼玉からも団体見学は多い。入館者も多い。

委員A：3県協働で、茨城は自然史博がありますし、なにか協働でできたら面白い。

現代産業科学館：葛飾区など、東京からの来館者も多い。